

インタビュー



いろいろな物事から 学んだ智恵や感性が 国語の力をつくる

資生堂名誉会長 福原義春 ふくはら よしはる

「21世紀活字文化プロジェクト」推進委員であり、
国語審議会委員のご経験もある福原義春氏に
お話をうかがいました。

国語の力がすべての基礎になる

世の中では、国語の力は当たり前のよう
に思われています。改めて国語の力をつけ
ようという意識は少ないように思います。
しかし、理科や数学ができるということとは
すべて国語力が基礎になって、論理が展開
できたり問題解決したりしているのです。
そのことが最近ようやく皆さんわかってき
た。これまで理科系のことがかかるには、
英語の論文を読まなくてはならないから英
語力をつけると考えていたのだけでも、実
はそうじゃない。英語力もその根本は実は
国語力です。

僕も二年八か月くらいアメリカにいたん
ですが、不思議と大阪弁の人は大阪弁の、
東北弁の人は東北弁の英語になるんですよ。
思考体系が違っんでしょね。だから、も
との日本語のコミュニケーション力が非常
に基礎的なものになっている。

つまり、国語の力とは、人間を人間たらしめるいちばん大きな事柄であり、それが社会をつくり、個人の能力をつくっていく

わけです。その力が衰えてくると、なんのおもしろさも創造力もない国になってしま
う。国としての力も、どんどん落ちていく
はずです。

創造的な言葉づかいができる人間を 育てる

動物行動学者のコンラート・ローレンツ
は、これから先、情報メディアなどの影響
で、人間の意識や情報がますます均質化し、
創造力が落ちるのではないかということ
を言っているそうです。確かに、テレビで
子どもたちへのインタビューなどを見てい
ると、みんな同じような表現をしている。
ボキャブラリーが減っているわけです。

だから、創造的な言葉づかいができる、
クリエイティブな行動のできる人間を育て
ないといけない。そのためにはいろいろな
カリキュラムの編成のあり方があるはず
です。例えば、その中には、齋藤孝先生
の「声に出して読みたい日本語」もあるだろ
うし、NHKの「課外授業ようこそ先輩」で

本川達雄先生がおやりになつていたような
思わぬものを子どもたちに見せ、それで
歌を作らせるというような練習もあるで
しょう。

だけど、こういうことを先生方はなか
かおやりになりませんね。一つは文部科学
省のカリキュラムにないこと、もう一つは
採点が非常に困難であるという理由からで
す。もう少し主体性をもっていたければ、
という気がしますね。

先生は子どもの能力を伸ばしてあげ る触媒

例えば、理科の先生がしゃぼん玉を作っ
てみせて、子どもたちにどうだったと聞い
たときに、ただ「きれいだった」というだ
けではなく、「しゃぼん玉にいろいろな形が
あるのがわかった」と具体的に述べていく
ことができる、それは国語能力の進化に
つながるんですね。そうすると今度は、観
察も鋭くなってくる。

いろいろなものを見ること、触れる ことが大切

現場の先生方は本当に熱心ですね。でも、
わたしは会社の社員に言うのだけれども、
物事とは熱心だから褒められるというもの
ではない。成果が上がるのが重要なので
す。その成果は何かといえば、学校の先生
としては、子どもの能力が向上すること
です。それが将来の社会を豊かにし、日本
の水準を高めることでもあるのです。

しかし、そのためには具体的にはどう考
えたらいいのか。文部科学省の通達には出
てきません。今の世相に、自分の地域に、
今の子どもたちに、いったい何が必要なの
かということは誰も教えてくれないし、ど
こにも書いていない。そういう見えないも
のを見る力、聞こえないものを聞く力が必
要なのではないでしょうか。

テレビを見ていてもだめだし、学習法な
どを調べたつてだめです。例えば、茶道の
世界に間違つて飛び込んでみると、思わぬ
ことを教わるかもしれません。いろいろな

ですから、どのようにしたらいろいろな
現象や感情をうまく表現することができる
か、ということをお教へてあげればいいわけ
です。それを評価して褒めてあげれば、必
ずその能力は伸びていきます。

今の先生としての義務のなかに、そうい
う状況がないのかもしれないですね。先生と
いうのは必ずしも教えるものではない。本
人の能力を伸ばしてあげるように触媒にな
っていくことが先生の役割なのではないで
しょうか。

それからもう一つ、教科書以外に、昔か
らある文学作品や優れた演説を鑑賞させて
あげることが必要ですね。そのときにわか
らなくてもいいんですよ。どこかに引つか
かっていけば、今はなんでも、子どもにわ
かりやすい方向に行く傾向がありますが、
子どもには多少取り付きにくくても、結局
後になってそれが役に立つという教へ方も
大切でしょう。

ものを見ること、いろいろなものに触れる
ことです。子どもたちに触れると言っただけ
ではなくて、まず先生自身がいろいろな世
界を体験する。そして実際に自分で書いた
り、表現してみたりすることが大切ではな
いのですか。

いろいろな物事から学んだ智慧、そして
感性、あるいはそこでの発見、そういうも
のが国語の力をつくっていくのだと思うの
です。

福原義春（ぶくはら よしはる）

一九三二年、東京生まれ。一九五三年、慶應義塾大学経済学部卒業
と同時に資生堂に入社。一九八七年、代表取締役社長就任。経営
改革、社内の意識改革を推進する。一九九七年、代表取締役会長。
二〇〇一年より名誉会長。企業メセナ協議会会長兼理事長、東京都
写真美術館館長。メセナの動き、メセナの心（求龍堂）、会社人
間、社会に生きる。（中公新書）ほか著書多数。